

会話分析におけるデータについて

服部 幹雄

Data in Conversational Analysis

Mikio HATTORI

1. はじめに

Maynard (1993) は、会話分析におけるデータを論じている章で、データを求める先として次の7種類をあげている。

- (1) 1 研究者が自分で考えて作り出したもの。
- 2 小説、ドラマ、また他の研究論文等の中から随時抜き出した会話。
- 3 ラジオ又はテレビの番組の一部を録音、録画したもの。
- 4 日常生活で使われる会話をそのまま録音、録画したもの。
- 5 ある一定の対象者を選んで研究のために集めた会話で、研究者又は研究に関係のある者が参加したもの。
- 6 研究者又関係者は参加せず、ある一定の決められた状況で集めた会話。
- 7 アンケート等の質問に答える形で集められた会話。

(Maynard 1993:62-63)

Maynard はどの種類のデータも多かれ少なかれ問題を含んでいるとしながらも、日常会話の研究の目的であるならば、5、6のタイプのデータが割合信頼がた、特に対照分析を目的とする場合には6のタイプが理想的であるとしている。日常会話をごく自然な形でとらえることができ、被験者や会話の行われるコンテキストを容易にコントロールできるという点を考えると、これはもっともな主張であると思われる。語用論レベルでの転移の研究でよく使われる、7番目のタイプのデータについては、Maynard は「不適當なのは一目瞭然」と述べている。確かにアンケートを通して得られる会話表現は、回答者がそのように答えるだろうと思いついて描いている表現に過ぎないことは言うまでもない。しかし、回答者が答える表現は、過去に体験された現実の会話に基づくものとも考えることもでき、一概に無意味であるとも言えないであろう。

本稿は、被験者が英語の母語話者および非母語話者それぞれの場合において、タイプ6とタイプ7のデータを比較対照し、会話分析におけるデータの問題について基礎的な考察を加えることを目的とする。

2. 方法

データ収集にあたって重要なことは、実際の会話から採取したデータ（以下会話データ）と

アンケートから得られたデータ (以下アンケートデータ) との相違が明確に観察されるような状況を設定することである。会話は本来とりとめのないものであり、ある発言にいかなる発言が続くかを予測することはほとんど不可能であるとさえ言える。仮に Yes-No 疑問文に続く応答を観察するとしよう。応答の解釈には明確な制約が課せられているとはいえ、¹ 応答として現実に生起する形式はそれこそ無限にあると言ってよい。これではアンケートデータと会話データの相違を興味ある仕方で浮き彫りにすることは難しいであろう。逆に、非常に儀礼化された隣接対句 (Merry Christmas → Merry Christmas など) の応答を対象にすれば、短い少数の定型表現しか現れず、アンケートデータと会話データとの相違がほとんど観察できないことが予想される。さらに、母語話者も非母語話者もほとんど同じような振る舞いを示す結果になる可能性もある。要は、応答の形式がある程度予想でき、その中でさまざまなストラテジーが観察できるような状況が望ましいのである。そこで本稿では、聞き手の期待に反する不同意の応答の中で、話し手が聞き手のみのなわ張りに属する情報を表現する状況を考察の対象とした。² 服部(1996)では、母語話者はこの状況において、さまざまなストラテジーを駆使し、非常に手の込んだ応答を行うことが報告されている。不同意という、本質的に非礼な発話行為を遂行しなければならないのに加えて、聞き手の独占している情報を表現しなければならない状況にあるため、話し手には極めて慎重な態度が要求されるからである。その一方で、現れるストラテジーの種類はある程度限られている。本稿の目的に適した状況と言えよう。

母語話者の会話データは、服部(1996)のために準備した約500の「陳述→不同意」の隣接対句から採った。これは12人のアメリカ人が交わした、のべ6時間にわたる会話の録音に基づいている。この約500の隣接対句から、応答の中で話し手が聞き手のみのなわ張りに属する情報を表現するという状況にある96の隣接対句を選び出した。母語話者に対するアンケートは、会話データで選んだ96の隣接対句の陳述の部分を実験として作成した。最終的に30種類の陳述とそれが発せられる状況を作り、18人のアメリカ人にそれぞれの陳述に対して不同意の応答を書いてもらった。

非母語話者の会話データは、8人の日本人大学生が英語で交わした、のべ5時間にわたる会話に基づいている。ここから「陳述→不同意」の隣接対句を抽出し、そこから応答の中で話し手が聞き手のみのなわ張りに属する情報を表現するという状況にある75の隣接対句を選び出した。非母語話者に対するアンケートは母語話者の時と同じものを使用し、27人の日本人にそれぞれの陳述に対して不同意の応答を書いてもらった。

こうして集められた不同意の応答を分析し、母語話者、非母語話者それぞれの場合における、会話データとアンケートデータの特徴を明らかにした。

3. 結果と考察

3. 1. 英語母語話者の場合

会話データとアンケートデータを比較してみると、応答が比較的慎重に行なわれている点は共通しており、応答の内部構造は類似している。たとえば、訂正情報や反対意見は例外なく間接形によって表現されている。また、不同意の核となる訂正情報や反対意見の表明は、応答の冒頭にいきなり現れるのではなく、通例 Really?、Are you sure? などの情報内容の確認あるいは That may be true.、You may be right. などの部分的同意を表す文によって先行されている。You are an expert in this field. など相手の face を立てる positive politeness を表す発言が反対意見の前に現れる事例も多い。ただし、訂正情報や反対意見の表明に先行する情報内容の確認、

部分的同意、positive politeness は、アンケートデータでは簡略に表現される傾向がある。

会話データとアンケートデータとの相違で最も特徴的なのは、前者において頻出する pause (silent および filled) が後者ではほとんど出現しないことである。well などの談話辞、yeah、[m] などの見かけだけの弱い同意を表す形式もアンケートデータには出現しにくいと言える。以下代表的な例に即して説明していく。³ (2)、(3) が会話データ、(4)、(5) がアンケートデータである。

- (2) A: I've got the afternoon off. Where shall we go?
 B: Oh really? ə:m Your secretary told me that ə:# you might have a meeting.
- (3) A: I don't like chicken.
 B: Oh really? ə: Don't you remember ə: that the time we ate at ə: BARNEY'S restaurant you had a ə: chicken salad sandwich?
- (4) A: That's the newest school in this town.
 B: Really? I heard from someone that X school is newer than that.
- (5) A: There used to be a lot of mills around here.
 B: Mr.X told me there used to be two or three mills in this area, but I wouldn't call that a lot.

最初に会話データから検討する。(2) は同僚同士の会話である。A が自分の予定について発言し、それに対して B が不同意を表明している。A の確定している行動予定についての情報は A のなわ張りに属するが、B は A の予定を管理する立場になく、この情報を自分のなわ張り内に取り入れることはできない。この状況では、聞き手との意見の相違をなるべく目立たせないようにする手立てが取られ、手の込んだ応答になるのが普通である。不同意の核となる訂正情報の表明にはほぼ例外なく間接形が使用される。you might have a meeting. がそれに該当する。さらに、応答の核となる訂正情報の表明を遅らせるさまざまな手立てが取られる。冒頭の Oh really? のような情報内容の確認もその 1 つであるが、ここで重要なのは pause の存在である。pause は息継ぎの目的のほか (silent pause のみ)、ストラテジーとしても用いられる (silent および filled pause)。pause は一見無秩序に生起しているように見えるが、多くのデータを観察すると、応答の最初、訂正情報あるいは反対意見の表明直前で頻出していることがわかる。これは不同意の表明を出来るだけ遅らせるためのストラテジーとしての pause であろう。(2) では訂正情報の直前に filled pause と silent pause が相次いで起こっているのが注目される。pause と共に重要な役割を果たしているのが談話辞である。談話辞は発話と発話を結び付けたり、話題の変更を指示したりする機能を持つものである。不同意の応答の場合、応答の最初で oh、well が、訂正情報あるいは反対意見の表明直前で well が出現することが多い。

(3) は同僚同士がレストランで食事を注文する場面で交わされたものである。A が自分の食事の好みについて発言し、B がそれに対して不同意を表明している。A の食事の好みについての情報は、A のみが知覚することによって得られる情報であるから、A のみのなわ張りに属する。ここでも、情報内容の確認に続いて間接形による反対意見の表明が現れるというパターンになっている。反対意見の表明の直前および chicken salad sandwich の直前の pause は、ストラテジーとして用いられたものであろう。

これらの会話データに対して、アンケートデータには、当然のことであるが、言いよどみは

見られず、pauseも稀にしか現れない。(4)、(5)は、Aが友人のBに自分の住む町を案内している場面が想定されている。両例共に、Aが自分の住む町について発言し、Bがそれに対して不同意を表明している。Aの住む町についての情報は、Aに深い地理的関係を持つ場所についての情報であるためAのなわ張りに属するが、この町を初めて訪れたBはこの情報を自分のなわ張り内に取り入れることはできない。Bの応答の核となる訂正情報の表明に用いられた間接形はこのなわ張り関係を反映したものである。(4)は会話データで典型的だった「情報の確認+訂正情報の表明」のパターンになっている。応答の基本的な内部構造は会話データとほぼ同じであると言ってよい。しかし、相違点もまた多い。前述のように、pauseはほとんど現れないし、現れたとしてもfilled pauseに限られる。談話辞の出現頻度も低い。(5)のように、訂正情報の表明が応答の冒頭にいきなり現れる例さえある。会話データでは、訂正情報が応答の冒頭に現れる事例はまったくないことを考えると、(5)はアンケートデータの特徴を如実に示すものと言える。

3. 2. 英語非母語話者の場合

被験者が非母語話者の場合は、全般に会話データよりもアンケートデータの方ががやや手の込んだ応答になっているのが特徴である。母語話者とは逆の傾向を示すわけである。たとえば、アンケートデータでは約8割の事例でなわ張り関係が守られ、訂正情報あるいは反対意見の表明が間接形で行われているのに対し、会話データでは直接形が半数近くの事例で見られる。聞き手のface (negative および positive) に配慮する発話が現れやすいのもアンケートデータの方である。pauseと談話辞は逆に会話データの方により頻繁に起こるが、非母語話者にとっては、pauseは主として適切な表現を探すための時間稼ぎの手段であり、ストラテジーとしての使用例は少ないことに注意する必要がある。以下実際の例に即して見ていく。(6)、(7)が会話データ、(8)、(9)がアンケートデータである。

- (6) A: I lived in T so many years and ə:
B: Really? You were born and raised in N.
- (7) A: T is a very safe city.
B: ## No, I don't think so.
- (8) A: I'm not sick anymore. I'm fine.
B: You look like sick. You should go to bed.
- (9) A: I was in a college, in N.
B: Excuse me, but don't you said that you were teaching in a college in S city?

まず会話データから検討する。(6)はAがBに自分の生い立ちを語っているところである。Bはこの会話以前にAが長年Nという都市に住んでいたことをA自身から聞いており、それに基づいてAの発言に不同意を表明している。Aの生い立ちについての情報は、Aの過去の生活史についての情報であるからAのなわ張りに属する。一方、Bはこの情報を知ってはいたが、それを近情報とする理由がない。よってこの情報はBのなわ張り内にはない。

(7)はT市の住人であるAがT市について発言し、それに対してT市とは関わりのないBが不同意を表明している。Aの住むT市についての情報は、Aに深い地理的関係を持つ場所についての情報であるためAのなわ張りに属するが、T市と特に関わりのないBはこの情報を自分

のなわ張り内に取り入れることはできない。

(6)は母語話者の会話データによく見られる「情報の確認+訂正情報」のパターンになっているが、訂正情報の表明に直接形が用いられている点が母語話者の振る舞いと大きく異なる。先述の通り、不同意の応答の中で、聞き手のなわ張りのみに属する情報を表現する時、母語話者は極めて慎重な態度を取るのが普通である。訂正情報あるいは反対意見を表明する文の中に間接形を構成する表現が2つ以上含む事例さえあるのは、この状況でいかに細心に聞き手のfaceに配慮せねばならないかを物語っている。(6)のようになわ張り関係に反する文形を用いることは、母語話者では意図的に聞き手のfaceを威嚇する場合以外考えられないことである。ではなぜ非母語話者は直接形を用いるのか。非母語話者がなわ張り関係を認知できないとは考えにくい。後述するアンケート調査の結果によると、すべての事例で訂正情報や反対意見の表明は間接形で行われているからである。母語話者は自分が置かれているなわ張り関係の認知はできるものと思われる。しかし、構文生成能力の低さゆえ、迅速な反応が求められる会話では、それを短時間に適切な文形に反映させることができず、間接形と比べ負担の軽い直接形を選択する結果となるのであろう。その他、非母語話者の会話データに顕著な特徴として、(7)のnoのように聞き手との意見の相違をあえて際立たせる表現、I don't think so.のような定型表現が多用されることなどがあげられる。

アンケートデータにおいては、非母語話者は会話データに比べてやや慎重な姿勢を見せる。(8)は自らの体調について発言したAにBが不同意を表明する場面が想定されている。Aの体調についての情報は、Aのみが直接体験によって得られる情報であるから、Aのみのなわ張り内にある。(9)は自分の経歴について発言した教員Aに学生Bが不同意を表明する場面が想定されている。Aの経歴についての情報は、Aの過去の生活史についての情報であるからAのなわ張りに属する。一方、Bはこの情報を知ってはいたが、それを近情報とする理由はない。よってこの情報はBのなわ張り内にはない。

アンケートデータを観察してまずあげられる特徴は、母語話者のデータと同様、訂正情報あるいは反対意見の表明がすべての事例で間接形で行われていることである。アンケート形式ゆえ、認知したなわ張り関係を適切な文形に反映させる時間が被験者に十分にあるためであろう。さらにアンケートデータでは、聞き手のfaceに配慮する politeness が応答の冒頭に観察される。非母語話者の場合、Excuse me., I'm sorry., I hate to say this. などの negative politeness が中心となっており、母語話者の会話データに多く見られた positive politeness は少ない。応答を考える時間的余裕がある分、母語である日本語からの転移が起りやすくなっているとも考えられる。

4. まとめ

母語話者の場合、アンケートデータは会話データにくらべて応答が簡略になることが分かった。特に、ストラテジーとして用いられた pause や談話辞がアンケートデータでは現れにくいところが問題である。Maynard が指摘する通り、やはりアンケートは会話分析のデータ収集手段として不適当であると言わざるを得ない。一方、アンケートデータにおいても、頻度は低いものの、情報の確認や positive politeness が訂正情報あるいは反対意見に先行しており、応答の内部構造は基本的に会話データと同じである。アンケートデータであっても、データの数を多くし信頼性を高め、会話データを補完する目的で使用すれば会話分析の有効な手段になり得るであろう。

非母語話者の応答においては、会話データがアンケートデータより簡略になる傾向が見られた。アンケートデータには、質的な相違は残るものの、母語話者の振る舞いに近いものも現れる。しかし、アンケートデータで非母語話者のコミュニケーション能力を判断することはやはり危険であろう。短い時間でなわ張り関係を適切な文形に反映させることもコミュニケーション能力の一部であると考えられるからである。

注

- 1 応答は通例 yes か no かのどちらかの意味を持つと解釈される。
- 2 情報のなわ張り理論の詳細は神尾(1990)を、不同意の応答と情報のなわ張り関係との関わりについては服部(1996)を参照。
- 3 会話中の固有名詞は一部仮名にした。表記上の約束は次の通り。なお大文字は音調の卓立を示す。
 - ・ 文末のイントネーションが認められ、文と認められる発話の終わる個所。
 - ? 疑問表現のイントネーションが認められる個所。
 - # はっきり認められる silent pause
 - ## やや長めの silent pause
 - ə, əm filled pause
 - ə:, ə:m やや長めの filled pause

参考文献

- Coupland, N., H. Giles & J. M. Wiemann (eds.) 1991. *"Miscommunication" and Problematic Talk*. Newbury Park:Sage.
- Goffman, E. 1983. *Forms of Talk*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.
- Hattori, M. (服部幹雄) 1996. 「『不同意』の応答ストラテジー」. 『筑波英語教育』. 第17号, 1-12.
- Kamio, A. (神尾昭雄) 1990. 『情報のなわ張り理論』. 東京:大修館.
- Labov, W. & D. Fanshel 1977. *Therapeutic Discourse*. New York:Academic Press.
- Maynard, K. S. (メイナード・K・泉子) 1993. 『会話分析』. 東京:くろしお出版.
- McCarthy, M. 1992. *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Owen, M. 1983. *Apologies and Remedial Interchanges*. Berlin:Mouton.
- Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and Disagreeing with Assessments:Some features of preferred/dispreferred turn shapes," in Atkinson, J. M. & J. Heritage (eds.) 1984. *Structures of Social Action*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Roger, D. & P. Bull 1988. *Conversation*. Clevedon:Multilingual Matters.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis*. Chicago:University of Chicago Press.
- Yagi, K. (八木克正) 1994. 「話し言葉の分析序説 ― インタビュー英語を使って」. 『日本英語コミュニケーション学会紀要』. 第3巻第1号, 1-6.